

忘れない！「千恵子」と「さかもと君」のこと

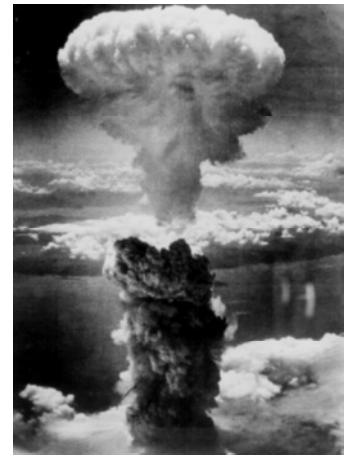
．．．． ナガサキ原爆の思い出

中道澄春 昭和7(1932)年生まれ

1．8月9日のこと

当時、私は長崎の諫早中学（現・諫早高校）2年生。
その頃は、勤労働員で学校横のカマボコ兵舎でゼロ戦の
エンジン組み立てをしていた。

8月9日の日は、近所の川に生えている葦を刈る作業に
みんなで出かけていた。午前11時2分にピカッと光った。
広島原爆投下の後だったので、誰かが「新型爆弾だ」と
言った。その日は、作業をやめて帰宅した。



いつも諫早駅の前を通過して帰るのだが、その日の午後
4時頃、長崎で被爆した人たちが次々に列車やトラックで運ばれてきた。とくに、印
象に残っているのは、被爆して鉢巻を巻いてまま運ばれてきた女子挺身隊の女性たち
だった。

2．父のこと

私の父は当時、三菱長崎造船所の職員だった。佐世保
の海軍航空隊、苦学してなった刑務官、そして三菱造船
所に勤めていた。

原爆が落ちた日、父は帰宅しなかった。同じ職場の人
が帰宅途中に寄ってくれたが「お父さんの働いていた付
近がひどかった」との話。

翌日になってもまだ帰宅せず、家族みんなで心配した。
結局、父が帰ってきたのは翌々日だった。



あとの話ではあるが、前はあんなに丈夫で病気もしたことがなかったのに、被爆後

の父は夏になると調子が悪くなり、病院を渡り歩いた。66歳で膵臓ガンのため死亡。

3．千恵子のこと

私たち家族の心配をよそに父は、昔下宿していた浦上のあたりを見て廻り、さらに父の兄の家族を捜しに行っていた。

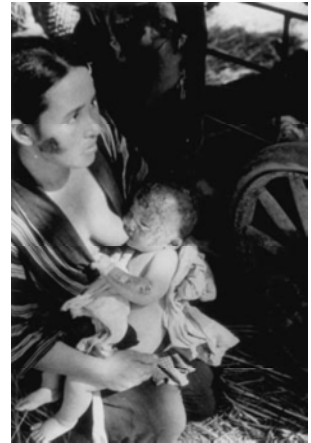
伯父の家族のお嫁さんが被爆してしばらく後に死亡したが、その前に胎内被曝した赤ん坊を出産していた。

私のいところになるその女の子は千恵子と名付けられたが、伯父が引き取った。

生まれてからあまり成長せず、体も小さかった千恵子。

例のABCC (Atomic Bomb Casualty Commission 米国の原爆傷害調査委員会) は、小さな千恵子を治療もせず、まるでモルモットのように月1回は調べていた。たしか10歳前後で死亡した千恵子。

彼女のことは今も忘れられない。



写真は文章と無関係です

4．私のこと

私のいた諫早中学には、長崎から多くの被爆者が続々と運ばれてきて、講堂や武道場に寝かされていた。夏場のことで、体に次々とウジが湧くし、みんな水を欲しがる。だが、水を飲ませたらすぐ死んでしまうので、私たちは水を飲ませまいとする。それでも水飲み場までやってきた被爆者を、心を鬼にして無理に押し返すのは本当に一苦労だった。結局、私が一番長い間この人たちを介護したように思う。

さて、1957年に被爆者手帳の制度ができたからの話。その頃、私は神戸に住んでいた。体は別になんともないので申請手続きをしないでいた。ある日、教会の宮崎先生が、この方は鎮西高校におられたので事情をよく知っておられ、「中道さん、申請しておいた方がいいですよ」と教えられて、私も手帳の申請をした次第である。県庁へ手続きに行ったら係の人が「諫早中学ですね」と、簡単に手続きは終了した。

5．さかもと君のこと

原爆が落ちてからのある日、長崎の海星中学から一人の転校生がやってきた。被爆のためすっかり脱毛した頭は丸坊主。名前はさかもと君。おとなしくて、やさしい中学生だった。

でも結局、さかもと君は、1週間ぐらいしか登校してこなかった。

その後、月日経って出会う昔の同級生に尋ねてみるが、消息どころか誰も彼のことを覚えていなかった。

でも、さかもと君、ボクは君のことを絶対忘れないよ！

